（附　記）

陸軍の兵制の概要と軍の組織

一、兵制の概要

(1) 兵制

男子が満二十才になると、徴兵検査を受けなければならない。徴兵検査は主に体格、疾病それに初歩的な学力を検査するもので、優秀なものから順に、甲種、乙種（第一、第二、第三）丙種と区分する。平時にあっては甲種の中から、くじ引きで入隊者を決めていたが、支那事変も長期化してくると兵員の不足を来して、甲種はもちろん、乙種の第一、第二までも入隊させて兵員の確保をするようになった。

右によって入隊させた者を、「現役兵」と称し、満二か年間軍務に就かせた。現役が終わった者および、検査に合格しないで軍務に就かない者を「予備役兵」といって、必要に応じて、「召集」を行い軍務に就かせた。丙種の者および予備役兵で高齢となった者は「後備役兵」といい、召集によって予備役兵が払底した場合に召集を受けるようになっていた。

軍の幹部である将校については、陸軍士官学校（海軍は兵学校）を設けて、上級幹部の養成を行っていた。陸軍士官学校の卒業者は、「現役将校」で、俗に職業軍人と呼ばれて

いた。しかし下級の将校については、編成上多くの人数が必要なため、入隊者の中で中等学校以上の学校卒業者の中から選抜して、予備士官学校で半年乃至一年の教育の後、予備役将校として採用した。

(2) 階級の制度

階級の制度は、将校・下士官・兵、と三区分され、またそれぞれの中は次のように判然と分かれていた。

・将校

将官――大将・中将・少将（通常将官になるためには陸軍大学校を卒業する）
佐官――大佐・中佐・少佐
尉官――大尉・中尉・少尉
准尉・見習士官

・下士官

曹長・軍曹・伍長

・兵

兵長・上等兵・一等兵・二等兵

二、軍の編成

軍の編成は、作戦の必要に応じてなされるものであり、また歩兵、砲兵、工兵等の兵種によっても変るものであるが、以下支那事変・大東亜戦時の歩兵の部隊関係について述べる。

軍↓師団↓（兵団旅団）↓連隊↓大隊↓中隊↓小隊↓分隊

軍は、通常数箇の師団や旅（兵）団で組織される。師団は作戦の単位となるもので、普通は三箇の歩兵連隊及び砲兵、騎兵、工兵の連隊各一、それに通信隊、輜重隊、衛生隊（含軍病院）防疫給水隊、等を以て組織し、師団の長には中将が任命される。

歩兵連隊をいくつか集めた歩兵団、いろいろな兵科を併せ持つ旅団は、必要に応じて設置され、これの長には少将が当てられる。

歩兵連隊は、総員約三千名、連隊本部と三つの大隊、それに歩兵砲中隊、迫撃砲中隊から成り、連隊長には大佐が当てられる。

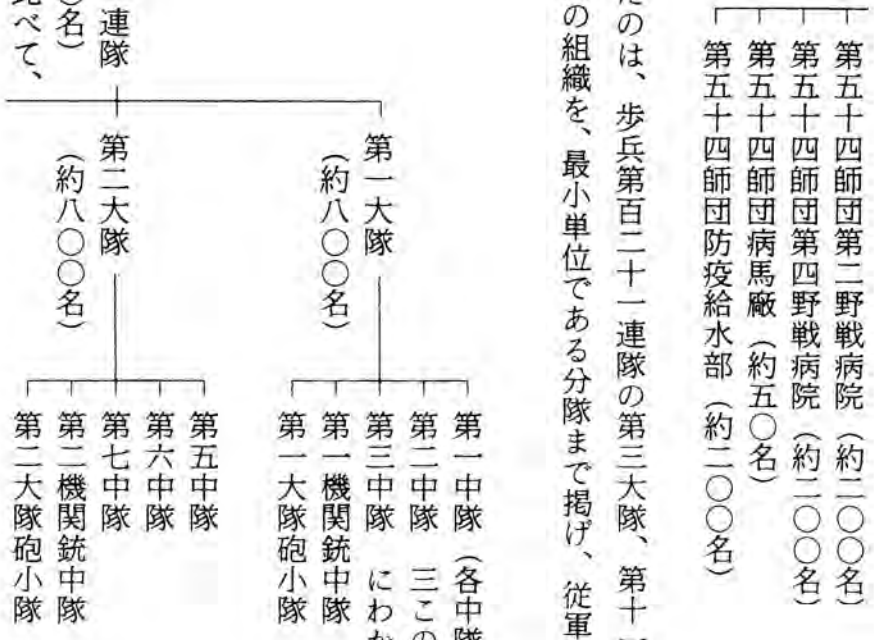
歩兵の大隊は、大隊本部と三つの中隊（正規編成の場合は四中隊）から成り、人員はおよそ八百人である。大隊長には普通少佐が当てられる。

中隊は一般に戦闘の単位で、指揮班と三つの小隊から成る。中隊長は普通大尉若しくは

中尉が当てられる。小隊は四つの分隊から成り、内三つの分隊は、それぞれ軽機関銃一、小銃十一を持ち、他の一つの分隊は、擲弾筒三こを持つ。小隊は約五十名でその長には少尉、時には中尉や見習士官、准尉が当たることがある。分隊は下士官の分隊長以下十二名で戦闘の最小の単位である。

ビルマ戦線出動に際して、私が所属した第五十四師団の第百二十一連隊の編成は、おおむね次のようであった。

- 第五十四師団
  - 第五十四歩兵団
    - 歩兵第百二十一連隊（姫路編成）（約三〇〇〇名）
    - 歩兵第百二十一連隊（鳥取編成）（内部は後記）
    - 歩兵第百五十四連隊（岡山編成）（約三〇〇〇名）
  - 捜索第五十四連隊（以下姫路編成）（約四〇〇名）
  - 野砲兵第五十四連隊（約一五〇〇名）
  - 工兵第五十四連隊（約八〇〇名）
  - 輜重兵第五十四連隊（約六〇〇名）
  - 第五十四師団通信隊（約二六〇名）
  - 第五十四師団兵器勤務隊（約一〇〇名）
  - 第五十四師団衛生隊（約六〇〇名）
  - 第五十四師団第一野戦病院（約二〇〇名）



私が所属したのは、歩兵第百二十一連隊の第三大隊、第十一中隊の第一小隊の長であった。以下連隊内の組織を、最小単位である分隊まで掲げ、従軍の記を読む際の参考にする。

第四、八、十二中隊を欠いだ編成である。）

- 第三大隊（約八〇〇名）
  - 第九中隊
  - 第十中隊
  - 第十一中隊
    - 第一小隊―第一、二、三、四分隊（約五〇名）
    - 第二小隊―第一、二、三、四分隊（約五〇名）
    - 第三小隊―第一、二、三、四分隊（約五〇名）
  - 第三機関銃中隊
  - 第三大隊砲小隊
- 連隊砲中隊
- 速射砲中隊
- 通信隊

（各中隊共、右に同じ）

（附記）

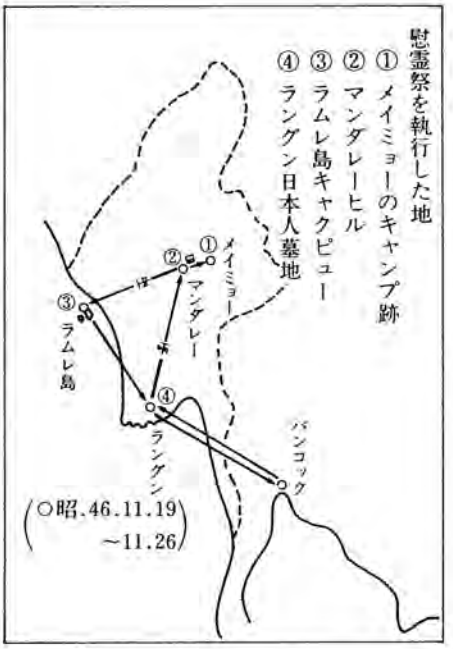
ビルマ慰霊の旅

一、昭和四十六年慰霊の旅

昭和四十五年夏、大阪において「万国博覧会」が開催された。その際出展された「ビルマ館」に、復員後に元第三大隊の兵で組織された「明妙（メイミョー）会」が、種々とお手伝いをしたのが機縁で、久しく鎖国状態にあったビルマに入国が許可されることになった。

そこで、翌年の暮、「ビルマ巡拝慰霊団」を組織して、大戦中に散華した数多くの戦友の慰霊の旅を実施することにした。慰霊団に参加した者は、僧籍にある者二人を含めて、戦友遺族の二十六名であった。旅行は昭和四十六年十一月十九日より二十六日までの一週間である。

一行は、大阪空港から、内地の菊の花や線香、お酒、菓子等の供物を携行して出発、途中タイ国のバンコックでビルマ航空に乗り替えて、ビルマ入り



をした。

そして、短い期間ではあったが、ビルマの各地に飛んで慰霊行事を挙行した。

第一回　抑留中のキャンプ地メイミョーの陸軍墓地
第二回　マンダレー丘（ヒル）のパゴダ高地
第三回　ラムレ島のオンドー村第二大隊本部陣地跡
第四回　ラングンのタモエ日本人墓地

帰国後の昭和四十七年一月、私が責任者となって、「ビルマ戦跡巡拝慰霊の旅」という小冊子を編集して関係者に配布した。この冊子に、私が寄稿した「ラングン・タモエ日本人墓地の慰霊祭」をここに転記して、慰霊旅行の概要を偲ぶことにする。

幾千万の兵を呑み込んだ
シッタンの流れ

メイミョーキャンプ跡の
陸軍墓地

十一月二十二日、内地ではすでに晩秋の候となっているが、ここラングーンでは、真夏の太陽がさんさんと照りつけている。午前中のシュエダゴンパゴダやラングン埠頭の見学を終えて、午後は、ビルマ訪問中最後のそして最大の慰霊祭である。

一時十五分、三井物産差し回しの車で、慰霊祭準備のためのお供え物を集め持った先発者がインヤレークの宿舎から出発した。後続の本隊は、約三十分遅れてバスで出発する予

マンダレーヒルにおける慰霊祭

タモエ日本人墓地の碑前における慰霊祭

定である。

日本人墓地は、ラングーン郊外のタモエにあり、丈余の赤煉瓦塀に囲まれた閑静な地にある。入口には門扉があり、入ってすぐ左手には墓守りの家がある。中に入ると、中央に参道が作られ、その両側には、見上げるばかりのゴムの大樹が並び、墓地一面に緑濃い葉陰をおとしている。広い地面には落葉の一枚もなく、箒目もあざやかな浄域である。壁に沿って、明治以来この地で亡くなられた先人のお墓が点々と立てられている。夏草の茂るにまかせた他国の墓地と全く対照的で、実によく手入れされている。聞くところによれば、日本人会で墓守りを雇い管理しておられるとのこと。日本人の祖先を敬い、先人を尊ぶ心の美しさを、この僻遠の地に来て改めて感じさせられる。

墓地の奥まった一隅に「大東亜戦争陣没英霊之碑」と銘記された三メートルもあろうかと思われる大きなコンクリート造りの碑が建てられている。

すでに、碑の前には三井物産の方々の手によって祭壇が作られ、現地で調達されたであろうたくさんの花束が飾られている。また供花に使われる花輪も準備されている。碑の前には、参列者用の椅子も整然と並べられ、準備は万端整っている。私たちは、内地から携行した菊の花、戦友の法名を書いた紙、お酒、煙草、お菓子等を飾り、線香ろうそく等を準備する。やがて本隊が到着、また在ラングーンの日本人会の方々が到着された。

二時三十分、来賓として鈴木大使夫人をはじめ、大使館の書記官、駐在自衛官、ビルマ政府からビルマ航空の専務、それに、林日本人会会長、小林三井物産支店長の御来臨をいただいた。

同行の植田君の開式の辞で、厳かに慰霊祭が開始された。最初は、黄衣に身をつつみ榔子の葉の団扇を持った五人のビルマ僧による読経である。あの独特なビルマ語のリズムが高く低く流れていく。ベンガルの海に、アラカンの山に、シッタン河の水辺に眠り給う英霊が、この祭壇に続々とお集まり戴いていることであろう。続いて献花、最初に大使代理として、書記官及び駐在官、次に日本人会会長、最後に親日家で大学教授のマッケン・イー婦人と続く。しわぶき一つしない静寂の中で厳粛に式が進められていく。参列者の脳裏には二十数年前、敵弾下で、また豪雨の中で苦楽を倶にした亡き戦友の姿が去来する。

次に山口団長の追悼文が奉誦された。——遠い異境で眠り給うみ魂よ、二十数年を経た本日只今、遙かな祖国より、漸くにしてお会いにやって参りました——辺地でさぞお淋しかったことでしょう。私たちはもっと早く来なければならなかったと思います。——切々たるその声は、碑を包んで立ち昇る香煙にのって、静かに静かに英霊に語りかけていく。声もいつしかうるんで、ともすれば途切れがちになる。参列者一同、万感ここに極まって皆涙している。——弾丸にたおれた君よ、マラリヤと栄養失調に命尽きた戦友よ、シッタ

ンの濁流に果てた君よ、今、君たちに会いに来たのだ。——あの時は、さぞつらかったろう。——君たちの御加護で日本も奇跡的な発展をしたよ。君たちの御家族も平和にくらしておられるよ——これからも祖国の平和と発展を見守ってくれよ。そして安らかに眠り給え——皆、滂沱と流れる涙を拭きもせず、唯々、黙座している。続いて僧衣姿も鮮かな山口、金子両氏による読経が行われた。お経の声は、あるいは高く、あるいは低く、祖国の香高い香煙と共に、ゴムの葉末を抜けて、ここラングーンの一隅からビルマの全土に広まっていくかのようである。

読経の途中から焼香が行われた。まず、大使夫人を先頭に来賓の方々、ビルマ航空の重役さんも敬虔な祈りを捧げて下さった。来賓に続いて、慰霊団の全員が準備された三つの香炉の前に進み出て、亡き戦友の冥福を祈った。最後に参列下さったたくさんの在留邦人の方々が丁重に焼香して下さった。黒い喪服を着られた婦人の後姿がとても印象的であった。

全員の焼香が済んだ後、団長から、大使館、ビルマ政府、在留日本人会の方々にお礼の挨拶があって、念願であった慰霊祭はとどこおりなく終わった。時刻は三時十五分。感激と緊張の一ときが過ぎ去り、何かしら心が軽くなったような感じがした。参列者の一同は、英霊と共に過ごした感激をかみしめるかのように、しばらく無言で立っていたが、やがて旅行社の方にうながされて散会し、碑前で参列者全員の記念撮影に移った。

本慰霊祭を、かくも盛大厳粛に営むことができたのは、万端準備下さった三井物産の方々、そして大使館、日本人会の方々の御協力と、団員の一致した熱意、それにも増して、我々の来訪を千秋の思いでお待ち下さったであろう諸英霊の御加護の賜物であろう。

二、平成二年慰霊パゴダ入魂式

昭和六十三年、私たちの百二十一連隊生還者（ビルマ会）の有志によって、英霊戦没五十年も近いことから、ビルマ戦線に散華（さんげ）した戦友の慰霊のため、現地ビルマのゆかりの地を選んで「慰霊塔」を建てるよう発議され、直ちに全員の賛成するところとなり、募金が実施された。

ビルマ会会員はもちろん、遺族からもたくさんの資金が寄託され、半年ほどの間にその金額も一千七百万円にも達した。そこで、会では建設委員を選出し、現地に赴いて種々交渉に当った結果、我が百二十一連隊が初めて戦闘を交えたラムレ島のキャクピュー海岸にほど近い丘の上に、ビルマ式の佛塔である「慰霊のパゴダ」を建立することになった。

建設工事も順調に進んで、平成元年末にはほぼ完成したので、平成二年二月末、慰霊団

を組織し、現地で佛塔の入魂慰霊祭を執行することにした。

二月から三月にかけてのビルマの気候は、乾季の最中で雨が降ることは絶無に等しく、気温も四月ほどには厳しくない絶好の季節である。慰霊団の一行は、戦友、遺族合わせて七十数名であった。一行は慰霊祭の供物や、現地ビルマ小学生への土産としてノート、鉛筆等を持って、大阪空港を出発した。途中バンコクに立ち寄り同地観光の後、二月二十六日、無事ラングン空港に到着した。

慰霊パゴタ入魂式

二月二十七日、早朝に宿を出て、ラングン飛行場から一路ラムレ島のキャクピューに向かう。眼下には、二大隊兵士を呑み込んだ、そして曽つて私が敵兵と組討ちをしたミンガンクリークの水路が、マングローブ林の中にくっきりと見える。

キャクピュー飛行場から約三キロメートル離れて新しく建てられてたパゴダまでシクロ（側に乗用の設備をした自転車）で行く。

パゴダは、その昔、英軍が大艦艇をもって上陸して来た地で、浜にせり出した高さ十メートルほどの小高い丘

の上に建てられている。完成直前ではあるが、未だ足場の材木が組まれたままである。パゴダ前の広場には、現地人によって作られた日おいのシートがけのある式場が準備されている。

不思議なことに、乾季の最中というのに、南西の空に一かたまりの白雲が現れ、時が経つにつれて、その白雲が慰霊祭が営まれるパゴダに向かって進んで来た。

式場には、ビルマの僧侶が十一人、百人ほどの現地ビルマ人が既に席に着いて、我々慰霊団の到着を待っている。新らしいパゴダの横では、盛装したビルマの踊りの一団が、楽器の音に合わせて、踊りを舞っている。

慰霊団の一行は、到着すると、直ちに持参した供物や線香をパゴダ前に供えて祭壇を作った。不思議な一ひらの雲以外は全く晴れ渡って、さわやかな夏空が広がっている。眼下には、波一つない紺碧のベンガルが水平線の彼方まで続いている。有り難いことに、州の警備兵までが、群衆の整理と我々のエスコートに当ってくれている。

午前十時、ビルマ寺院による「パゴダ竣工式」が始まった。まず、例の椰子の葉で作った大きな団扇を持ったビルマ僧の読経が厳かに誦えられる。参列の団員、ビルマ現地人は、粛然として姿勢を正してお経に聞きいる。この地で、かつて、英軍が大砲爆撃と共に上陸して来て、我が連隊の第六中隊が死闘を演じたさまが、眼前に髣髴としてくる。

お経が終って、いよいよパゴダの入魂式である。金製の小さな佛像をはじめ、陶製のさまざまな佛像や宝物が、現地人や団員代表の手で奉持され、塔を三回まわった後、一つ一つ塔内の心の基部に納められた。この間喜びの舞楽が続いている。やがて、総ての佛像や宝物を塔内に納め終って、これ等を納めた穴の口が塞がれて式は終わった。

続いて、慰霊団による「鎮魂慰霊祭」に移った。先ず同行した僧侶によって、日本の読経が始まった。終わって、遺族及び戦友代表による「慰霊祭文」の奉呈があった。戦友代表では、元百二十一連隊関係の将校は私ひとりであった関係で、私が祭文を読んだ。日本の慰霊祭が始まるころ、例の一片の雲はちょうど頭上まで来て、急に大粒の雨を降らし始めた。私が祭文を奉呈するとき、大粒の雨が沛然として降り出した。祭文の奉呈が終わって参加者一同が焼香に移るころには、雲は静かに頭上を離れて北東の方向に去っていった。後は、いつもの乾季の空で太陽がさんさんと輝いている。多分、英霊が雲となって、慰霊の誠を捧げるためはるばる故国からやって来た我々の至誠に照応して、この祭場に来臨して下さったに違いないと、みんなが感動を以って話し合ったことだった。

私が、新しく建立された慰霊パゴダの前で奉呈した祭文は、次のようであった。

慰霊鎮魂の詞

ここビルマの地に眠り給う英霊の皆様に謹んで申し上げます。

私達七十二名は皆様の故郷、鳥取・兵庫そしてその近隣の府県から、英霊の鎮魂を念じて建立しましたパゴダの鎮魂供養と、日緬友好の碑の除幕のため、只今参着致しました。今次大戦が終わりましてから既に五十年に近い歳月が流れておりますが、私達は皆様と苦楽生死を共にした当時のことを片時も忘れたことがありません。

且ての軍歌の中に「ああ惨、悲惨、惨の極」という歌詞がありましたが、此処ビルマの戦局は、まさに文字通りの「惨の極」そのものでありました。

昭和二十年一月二十一日、このラムレ島を守備していた我が歩兵第百二十一連隊第二大隊に対し、戦艦・大航空団に支援された英印第二十六師団が大挙来襲し、上陸を開始して参りました。これが、わが連隊の緒戦であります。当時、敵の上陸を迎えて、激烈な戦闘が始まったのが、キャクピューの此の丘、此の海岸であります。それから一ヶ月、ラムレの全島を血に染めての激戦死闘が続きました。この戦で猪股大隊長以下七百名の命が、祖国護持の大使命に散華されたのであります。

続いて、連隊主力は、アラカン西岸のタンガップ地区に於て、南下を企図する圧倒的優勢な敵を迎え、激戦につぐ激戦を展開しました。此の戦に於ては、小南守備隊の壮烈

な玉砕をはじめとして数多くの戦友を失いました。

次で、雨季の到来と共に、戦史にも、未だ且てその例を見ない「ビルマ横断敵中突破」の邁作戦に移りました。機甲力を伴う敵陣の間隙を縫って実施したプローム街道の突破、人跡未踏の大竹林の中、連日の篠つく雨と泥濘、加えて食糧の欠乏とマラリヤの猖獗に悩まされたペグー山系の転進は、人間の生の限界を越えた地獄絵図でありました。そして、七月二十日全軍一斉に開始した最難関シッタン平地突破の戦闘は、執拗熾烈な砲銃爆撃のもと滔々渦巻くシッタンの濁流を、筏に身を托して渡河を強行した悲惨極りない戦闘でありました。

この戦闘で我が軍の尊い犠牲は数万人といわれ、私達の連隊では、山根第三大隊長をはじめ実に夥しい戦友が不帰の人となられました。ビルマ戦線で昭和二十年八月までの間、わが百二十一連隊の戦没者は二千三百柱、我々の所属した第五十四師団では一万一千余柱、ビルマ全土に於ける戦闘で祖国鎮護に殉じられました方は、実に十八万柱にものぼります。寔に痛恨の極みであります。

故国を遠く離れて五千キロ、只管に祖国の繁栄と民族の自立発展を念じ、苛酷な気候風土の中、一身を抛って任務に殉じ、終に帰らぬ人となられました皆様、皆様の御導きと御加護によりまして、今や日本の繁栄は世界に冠たるものとなりました。

私達は、かねてから原隊所在地の鳥取にパゴダを建て、慰霊の誠を捧げて参りましたが、此の度有志者の献身的な奉仕と努力により、遺族と戦友の願いを結集して、ここキャクピューの丘に、慰霊鎮魂のパゴダを建立致しました。

「仏教に厚く帰依しているビルマの人々は、現世を離れた人の魂は総てパゴダに回帰すると信じている。」と聞いております。

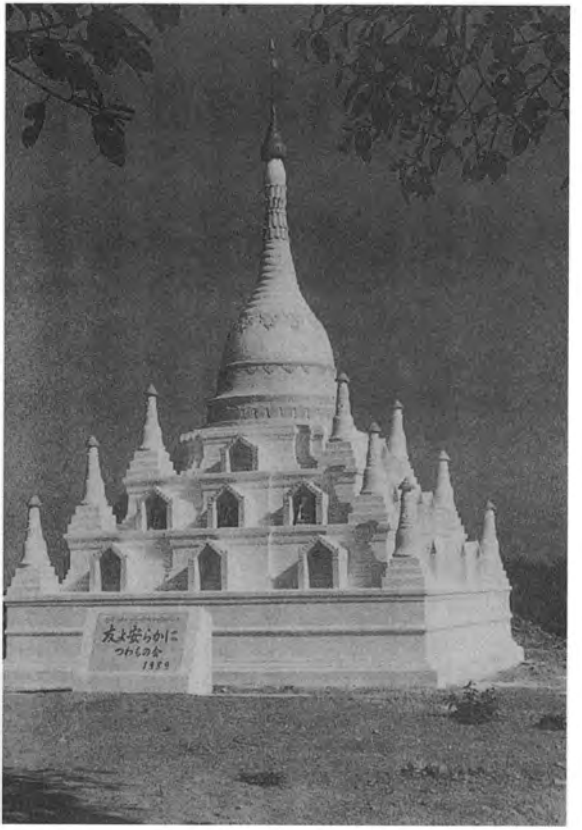
故郷を遠く離れた異境ビルマの地で散華され此の地に眠ります英霊の皆様何卒私達の心からなる慰霊の至情をお汲み賜りまして、アラカンの山から、ペグーの竹林から、そしてシッタンの川面から、此のパゴダに来たり鎮まりまして、永遠に安らかな眠りにおつき下さいます様念願するものであります。

私達は、今茲に皆様の新しい依代となりましたこのパゴダに額き、故郷の香華を手向けて、永遠なる鎮魂と感謝慰霊の至情を捧げるものであります。

見はるかす紺碧のベンガルが奏でる小波の囁きと、磯の椰子林を吹き渡る涼風の中、朝日に輝き夕陽に映えるこの丘、このパゴダに鎮まりまして、御遺族の上に末長い御加護を垂れ給い、又祖国日本の平和と発展を御照覧下さいますようお願い申し上げまして、鎮魂の辞といたします。

平成二年二月二十七日

元歩兵第百二十一連隊
第三大隊副官　小松正雄



戦友で作ったキャクピュ慰霊バゴダ

あとがき

○　従軍の記を書き終えて、今さらのように思うことは「よくぞ生きて来れたものだ」ということであり、これは、作戦の一区切り毎にも強く感じてきたことでもある。したがって本書の題名を選ぶに当って、ためらうことなく「死線を越えて」とした。しかし、後になってわかったことであるが、大正九年に、同名の本が賀川豊彦先生によって既刊されているということである。私が私の人生経験の一部を児孫に遺すために書いた本書の題名が、結果として、賀川先生の書名と同じくなったことについて、何卒ご理解を戴きたい。

○　本書を作るに当って、特に校正の段階でかっての内中原小学校時代からご厚誼をいただいている、石富寅芳・大坪紀代子の両先生に格別お世話になったことを記して感謝の意を表する

○　表紙のカバーに使用した写真は、平成二年二月ビルマのラムレ島キャクピューの丘に戦友遺族が慰霊鎮魂を祈念して建立した「慰霊パゴダ」の落慶当日の模様である。

死線を越えて（初版）
中支ビルマ戦線従軍の記

一九九二年十一月三十日

著者　小松正雄
699-04　島根県八束郡宍道町東来待五〇〇―一六
電話　〇八五二―六六―一〇六四

印刷所　株式会社報光社

死線を越えて（復刻）

追　記（二〇〇一年一月）

○ビルマ慰霊訪問
一、第三回　慰霊の旅
二、第四回　家族旅行
三、小学校舎の寄贈

○戦　友　会
(1)鳥取県ビルマ会　(2)明　妙　会
(3)ビルマ春秋会　(4)十一中隊会・ビルマ士の会

一、第三回慰霊の旅

第一回慰霊の旅（昭和四十六年）、第二回慰霊の旅（平成二年）については先述の通りである。

第三回目の慰霊の旅は、平成五年一月二十二日から六泊七日、団員二十七名（内遺族七名）で実施された。一行の中には、岩手県から参加の元第六中隊長及川康一氏もおられ、また私の相棒として、津山市の石田和男氏（元第三大隊砲隊の小隊長）が終始一緒だったので万事心強く楽しい旅であった。

慰霊祭を実施した場所

○二十二日　ヤンゴン市のタモエ日本人墓地「大東亜戦争戦没英霊碑」前にて

○二十四日　メイミョー元抑留キャンプの墓地

マンダレイの北西サガイン丘の日本人墓地（ここは、十五軍や三十三軍のマンダレイ守備戦陣地であったわが二十八軍は戦斗していない。）

○二十六日　ラムレ島のキャクピューにある去る平成二年にわれわれの鳥取の戦友や遺族が建立したパゴダ。ここの慰霊祭が本事業での最大の目的であった。

○二十七日　ミンガンクリークのマングローブ林地帯で、船上慰霊祭。（ラムレ島守備

隊が敵艦船に完全包囲された中を、三々五五と敵中を本土目指して渡渉した現地、たくさんの戦没者を出した。）

○二十九日　シッタン河渡河点での慰霊祭

慰霊パゴダ前で（山根氏提供）

戦後五十年、訪緬三回目にして漸く、このシッタン河畔に立つことができた。我が大隊にとっても最大の犠牲者を出した恨み深きこの渡河点で慰霊の祭を営むことができたのは、何としても有り難いことであった。

この度の訪緬での大きな収穫は、石田君の紹介によって、キャクピューのウー・モン・チェ君及びマンダレーのミン・スエ君と友達になれたことである。二人の何れもビルマ人で、モン・チェは、かつての大戦中、石田君の隊へよく遊びに来ていた少年、現在はキャクピー高等学校の先生を退職して、政府機関の出先の共同組合勤務。彼は平仮名で手紙を書くことができ、其の後再々の来信があった。ミン・スエ君、彼の父がかつてのビルマ防衛

軍関係で日本軍と接渉を持っていた人、マンダレーで彼の家へ一夜招待を受けた。その家の若いのが、ミン・スエ君で、彼もよくかな文字の手紙をくれる。両君共、今日まで互いに交流を持つ様になった。

二、第四面訪緬の家族旅行

平成十年三月、私の青春を捧げ尽くして死斗に明け暮れしたビルマ（ミャンマー）を是非家族にも知って欲しいとの願いから、慰霊と観光を兼ねての旅行を企画した。参加者は私達夫婦、娘夫婦の四人（息子の方は、勤務の都合で不参加）であった。（小松正雄・君江　川本恭太郎・牧子）

三月二十五日、午後四時、関西国際空港発、六時間のフライトでヤンゴン空港に着く。夜遅い到着にもかかわらず、ミンスエの一家が出迎えに来てくれていた。豪華な日航ホテル泊。翌二十六日は、第一番に、新装なった日本人墓地に参詣する。献花用の花は、ミンスエ君が用意してくれる。慰霊参拝が終わって、北約八十キロにある、パゴーの観光をする。ミンスエ君も奥さんと長女の三人連れで自家用車で追随、観光や食事等万事世話をして呉れ、焼けるように暑い真昼の観光には大いに助かった。翌

日からは、飛行機を使って中部ビルマの、マンダレー、パガンを観光。二十九日再びヤンゴンに帰り、夜はミンスエ君一家の「招待晩餐回」。ステージ付きの中華料理店で楽しい一時を過ごした。同道した三人は異口同音に、仏教国ビルマの人々の純朴さと親切。未だ俗化していない。生の歴史的文化遺産の美しさに感嘆する旅であった。

○　本年（平成十二年）十月六日「鳥取県西部地震」が発生し、その状況がニュースとして全国に大きく報道された。

地震発生から間もない、十月八日の夜八時半頃、電話のベルが鳴った。何の気なしに受話器をとると、聞き馴れない話ぶりで

「おとうさん・ぢしん　だいようぶですか。」

その声、この話しぶりは、まさしく「ミン・スエ君」と直ぐに気付いた。

「ミン・スエ君だね。今、どこから電話しているの。」

「ミャンマー、ヤンゴンからです。みなさんだいじょう

ミン・スエー家の歓迎晩さん会

ぶですか。」

「ありがとう、ありがとう。みんなげんきだよ。」

国境、民族の違いを越えての友情、人間愛は本当に有り難いものですね。

三、小学校校舎の寄贈

我々鳥取県ビルマ会が、関係遺族と協力して英印軍との戦端を開いた地、ラムレ島の北端の丘に、「慰霊パゴダ」を建立したのは、平成三年であった。建立に際しては、地元のビルマの人達の絶大な援助支援があったからこそこの事業を成功させることができた。

その後毎年代表者を送って、パゴダの前で慰霊祭を実施して来ている。そして慰霊団員は、その都度、種々の学用品等を準備して、パゴダの地元の「ザタヤ小学校」を訪れて児童達に配布して喜ばれて来た。

平成七年（一九九五）の慰霊団が、小学校を訪れた際、「我々で可能な支援をしたいが、今学校で最も困っていることは何か。」と問うと、校長はすかさず「それは雨漏りです。雨季になると、ニッパ椰子の葉で葺いた屋根から雨がザーザー漏ってきて

授業になりませんので、学校を休みにすることが多いです。」「雨の漏らない屋根が欲しいです。」と答えた。

そこで代表達は、屋根と壁をトタン張りにする場合の見積りをさせると、ビルマ会として「支出可能な金額」と判断。直ちに立て替えて持ち金を渡して業者による工事に着手する様指示した。

校舎は、長さ六〇フィート（約二〇メートル）幅二十一フィート（約六メートル）、総二階で各階三室。一教室の広さは約三十六平方メートル。教室児童定員は三十五人くらいとのこと。

現在児童数二四〇名、一回には教室に収容できないので、午前組（七時～十二時）と午後組（十二時～十七時）の二部授業をしているとのこと。

団員が帰国して、ビルマ会役員会にこの件を報告し、協議したところ、全員一致で賛同し、パゴタ基金から支出することになった。

勿論次年の慰霊団は学校側から、雨季でも支障なく学習ができるようになったと大喜びで感謝されたところである。

次に平成九年慰霊団が、小学校を訪問したとき、校長から大変な相談というかお願いを受けた。と言うのは、「年々村の就学児童が増えて、二〇〇〇年頃から、学校では

村の児童が収容しきれなくなる。」というのである。ミャンマーでは戦前の我が国のように、学校の校舎や施設はその地域で準備することになっている。が、しかしビルマの田舎はどこもそうであるように、最貧の生活状態で、学校どころではないのが実情である。校長はその様な事情から、日本人に頼めば何となるのでは、との一縷の望を持っての話である。

彼の願いというのは、六〇フィートに十六フィート位の平屋の校舎を建てたい。金額はおよそ七十万チャット。日本円にして四十三万円余ということである。

団員は、帰国してから早速、ビルマ会の役員会にこのことを諮った。会での意見では、」将来にわたって慰霊パゴダの維持管理は、地域住民の人々にお願いしなければならないだろうから、今、地域からの要望には答えるべきである。」との意見が大勢をしめた。

ところで経費の方は、「学校の申し出は最小限のものであり、実際には倍額の七、八十万は必要であろう。」ということになった。

丁度その頃、戦斗中にラムレ島から脱出され、帰還後に戦記を出版された、故君野駿平氏の遺族から二十万円の寄附の申し出があり、会から三十万円支出、山口岩夫外戦友有志からその上必要な部分の寄附の申し出を受け、八十万円を建設費として準備

することにした。

平成八年四月、山口岩夫、池田勝美の両氏が会を代表して現地に赴き資金を渡すことにした。

当日は、県知事はじめ県の学務関係者、学校職員、地域の要人等多数の参列のもと、資金の贈呈式が盛大に行われた。

校舎は一段と規模を大きくして、八十フィートに二十フィート、五教室とし、相当の余裕を以て児童収容が可能なものとした。

工事責任者は、現地のウ・トンリン、工期は、九八年五月から三ヶ月で竣工予定。一切の監督は知事が当たってくれることになった。

一九九九年三月五月、山口君と遺族を代表して鳥取市の山下千枝氏が、完成の点検を兼ねて、新築になった学校を訪問、校長地区代表に迎えられて、新校舎を見て回り、校長から工事明細と建設竣工の説明を受けた。結局総経費は附帯工事も含めて、六十三万円余であった。

新装なったザタヤ小学校

丘のパゴタに鎮座ましまします英霊達も郷土の戦友遺族が造った新しい校舎で喜々として勉学に励むこども達の姿を日々に眺めて、きっと満足してくれるに違いないと信ずるものである。

（山口岩夫氏資料提供）

○戦　友　会

(1)　鳥取県ビルマ会

ビルマ派遣になった我々の歩兵第一二一連隊は、昭和十八年三月、鳥取市で鳥取県と兵庫県の兵を召集して編成されたものである。復員後に陣没戦友の慰霊と戦友相互の親睦を目的として、鳥取県関係者による「鳥取県ビルマ会」が結成された。

私は結成の当初より、在隊中の職務の関係で「顧問」の名称で今日まで深くかかわって来た。主たる仕事は、

1　戦史の作製
2　慰霊塔の建設と維持（鳥取市の円護寺及びビルマ現地ラムレ島キャクピューの丘）
3　慰霊事業
4　会員の交流親睦　等である。

現在、会長　竹内　勉氏、事務局長　小倉　米蔵氏で県の東部、中部、西部に各支部を設け活動をしている。

本会結成以来、本会の役員会、総会及び東部及西部総会には万難を排して出席することにしている。

（私は県外の関係で同会の顧問となっている）

(2)　明　妙　会

聡隊の中の兵庫県関係者で結成した会である。会の名は、終戦後の抑留中、兵庫出身者で編成した第三大隊が、ビルマ中部の「メイミョウ」という町にキャンプをしていたということから、その町名を漢字で表したものである。私は、その第三大隊の副官であったという立場から、帰還後同会の「顧問」として遇されていた。

昭和四十五年に大阪で開催された「万国博覧会」で、ビルマ館の建設や運営に協力したことへの謝意として、未だ鎖国的であった同国から「慰霊団としての入国」を許されたことは、今でも心に残る出来事であった。同会は、明石市の浜光明寺の住職であった「山口諦存氏」が中心となって運営されて来たが、平成五年、英霊の五十回忌を以て、団員老齢のため同寺に「戦没者の永代供養」をお願いして解散となった。

(3) ビルマ春秋会

復員将校のうち、予備後将校（召集により入隊した将校）を以て、親睦を目的として結成された会。昭和六十三年二月、石田、遠藤氏等の発起により、年に二回の会合を持つこととしたことから「春秋会」と名付ける。初代会長は、川崎市在住の「池口輝夫元大尉」。平成十年同氏死去。その後は中尉の階級にあった私が会長として運営されている。現会員十一名。会員は東は名古屋から西は博多まで会合は輪番で担当し、設営する。本平成十二年春の会は、石田和男氏担当で第二十四回目の会として、岡山市で開催した。

(4) 第十一中隊会・ビルマ士(さむらい)の会

昭和五十二年、智頭町の大坪健治氏をはじめの鳥取市近辺の戦友の提唱によって「第十一中隊会」が結成された。戦後の激動期を乗り切って、漸く一息つくことのできる年令である。各中隊共この頃から中隊会が結成された。

第十一中隊会は、中隊内で唯一人の生還将校である私を中心として、毎年開催されて来た。中でも昭和五十五年と平成四年の秋には、全員東京九段の靖国神社に詣でて、陣没戦友の霊を慰めることができた。平成三年からは、会員の高齢化により、互に語

り合う機を増すこととして、年二回の会合とした。

平成八年に至り、会員の高齢化には抗し難く、中隊会を閉会、解散するところもだんだんと増加する状況となった。そこで組織が、しっかりしている我々の十一中隊会が、これ等解散した中隊会メンバー中の希望者を吸収し、連隊全体の会とすることとし、十一中隊会で発展的に解消して、希望する遺族戦友が参加した会の「士（さむらい）の会」を結成した。ビルマ士の会は十一中隊会を継承して、平成十二年現在で早三十四回の会合を持つことになり、会員も遺族の十名を含んで五十名の大きな会となっている。

歩兵第百二十一連隊　第十一中隊会及び

ビルマ士（さむらい）の会歴

士(中隊)会総会歴					
回	年度	会場	回	年度	会場
1	52	鳥取	18	4秋	靖国神社
2	53	湯村温泉	19	5春	鳥取
3	54	皆生温泉	20	5秋	皆生温泉
4	55	靖国神社	21	6春	隠岐
5	56	鳥取	22	6秋	須磨
6	57	神戸	23	7春	鳥取
7	58	大山	24	7秋	玄武洞
8	59	岩井温泉	25	8春	神戸
9	60	天ノ橋立	26	8秋	鳥取
10	61	三朝温泉	27	9春	玉造温泉
11	62	浜村温泉	28	9秋	羽合温泉
12	63	生駒	29	10春	須磨
13	H1	淡路	30	10秋	皆生温泉
14	2	玉造温泉	31	11春	松江温泉
15	3春	七釜温泉	32	11秋	鳥取湖山の池畔
16	3秋	関金温泉	33	12春	松江温泉
17	4春	舞鶴	34	12秋	東郷温泉

→（以下 士の会）

第十一中隊会・昭和59年8月・於鳥取県網代（あじろ）

著者七十二年の軌跡（八十年）

年号	年令	記事
大正九年 （一九二〇）	0	・十月二十六日島根県八束郡岩坂村（現八雲村）大字東岩坂一八三番地で小松潔、マスノの二男として誕生。
昭和二年 （一九二七）	7	・八束郡岩坂村尋常高等小学校に入学
昭和七年 （一九三二）	12	（岩坂村大字東岩坂一八一番地に家を新築、一家移転） （五・一五事件）
昭和八年 （一九三三）	13	・岩坂村尋常高等小学校の尋常科卒業（優等賞を受賞）
昭和一〇年 （一九三五）	15	・島根県立松江中学校に入学（松江市北堀町・現北高等学校） （一年から三年まで、宍道湖一周耐久ランニングを完走。四年以降廃止）
昭和一二年 （一九三七）	17	（支那事変勃発、従兄北支で戦死）
昭和一三年 （一九三八）	18	・松江中学校を卒業（学術進歩賞・精勤賞を受賞） ・島根県師範学校第二部入学（松江市外中原町・現松江一中）

昭和一五年（一九四〇）	20	・師範学校を卒業（優等賞を受賞）・鹿足郡津和野町尋常高等小学校訓導として赴任・鳥取中部第四十七部隊に入隊（十二月） ・中支の戚墅堰（せきしょえん）に派遣（紀元二千六百年祭）
昭和一六年（一九四一）	21	・徐州に移駐・幹部候補生に合格、豊橋陸軍教導学校に入学（十月）（十二月八日大東亜戦勃発）
昭和一七年（一九四二）	22	・教導学校を卒業、鳥取第四十七部隊に転属、見習士官（四月） ・現役満期、予備役陸軍少尉に任官、引き続き臨時召集（十二月）
昭和一八年（一九四三）	23	・歩兵第一二一連隊動員、第十一中隊第一小隊長としてビルマ派遣（四月出発、上海、サイゴン、マレー半島、ラングン）
昭和一九年（一九四四）	24	・陸軍中尉に昇進・サンドウエイ——チェドバ島——ラムレ島——テード地区の防衛・第二遊撃隊長となる。
昭和二〇年（一九四五）	25	・第三大隊副官に就任——タンガップ戦闘・邁作戦——敗戦（八月） ・抑留生活（パヤジーキャンプ）（父死去十一月）
昭和二一年（一九四六）	26	・抑留生活（メイミョーキャンプ）

昭和二二年（一九四七）	27	・復員、解隊（広島において、七月） ・八束郡岩坂村立岩坂小学校教諭として再就職（八月）
昭和二五年（一九五〇）	30	・八束郡揖屋町立揖屋小学校転任 （福本君江と結婚・揖屋町八四九番地に新居）
昭和二六年（一九五一）	31	（長女牧子誕生）
昭和二八年（一九五三）	33	・松江市立朝日小学校へ転任 （長男、直人誕生）
昭和三〇年（一九五五）	35	（八束郡八雲村大字東岩坂一八一番地に転居）
昭和三一年（一九五六）	36	（日本数学会総会において、「算数教具」について発表）
昭和三二年（一九五七）	37	・松江市立母衣小学校へ転任

昭和三三年（一九五八）	38	（日本数学会総会において、「四則の意味」について発表）
昭和三五年（一九六〇）	40	（日本数学会総会において、「幼児の数概念の発達」について発表）
昭和三七年（一九六二）	42	（日本数学会総会において、「文章題の解き方」について発表）
昭和三八年（一九六三）	43	（揖屋町八四九番地へ福本亮治の後見人として入居）
昭和四〇年（一九六五）	45	・八束郡東出雲町立意東小学校教頭に就任
昭和四四年（一九六九）	49	・松江市立古江小学校校長に就任
昭和四五年（一九七〇）	50	・島根県算数数学教育研究会副会長

昭和四六年（一九七一）	51	・第一回ビルマ慰霊巡拝の旅（十一月）
昭和四七年（一九七二）	52	・松江市算数教育研究会長
昭和四九年（一九七四）	54	・松江市立内中原小学校校長に転任
昭和五〇年（一九七五）	55	・島根県教育委員会より表彰を受ける。（永年勤続）
昭和五二年（一九七七）	57	・島根県算数数学教育研究会長
昭和五三年（一九七八）	58	・松江市小学校長会長・島根県小学校長会副会長 ・島根県小中学校長会教育振興大会実行委員長
昭和五四年（一九七九）	59	・小学校長退職、教職期間三十九年（松江市教育委員会より表彰を受ける）・日本赤十字社島根県支部へ嘱託として勤務（四月）

昭和五五年（一九八〇）	60	・八束郡八雲村教育長に就任（七月） （母死去、二月）
昭和五六年（一九八一）	61	
昭和五七年（一九八二）	62	（島根国体ライフル射撃会場となり、実行副委員長となる） （島根国体開催）
昭和五八年（一九八三）	63	（八束郡宍道町大字東来待五〇〇―一八に新居竣工、六月）
昭和五九年（一九八四）	64	・島根県町村教育長会会長就任、全国町村教育長会理事就任 ・中国五県町村教育長会会長就任
昭和六一年（一九八六）	66	・八雲村教育長を辞任（十月） ・日本赤十字社島根県支部百年史編纂委員を委嘱される（十二月）
平成二年（一九九〇）	70	・第二回ビルマ慰霊パゴダ入魂ならびに慰霊の旅（二月） ・日本赤十字社島根県支部百年史の編集終了、刊行（六月）

平成三年（一九九一）	71	・日本赤十字社島根県支部退職（三月） ・日本赤十字社島根県支部退職（三月）
平成四年（一九九二）	72	・従軍の記「死線を越えて」を出版（十一月）
平成五年（一九九三）	73	・第三回ビルマ慰霊の旅
平成八年（一九九六）	76	・叙勲（勲五等双光旭日章（四月） ・ビルマ士の会発足（十月）（腹部動脈流手術）
平成十年（一九九八）	78	・第四回ビルマ家族旅行（三月） ・ビルマ春秋会会長
平成十三年（二〇〇一）	81	・死線を越えて復刻 ・釘一つ打つ―校長と三冊の本―出版

死線を越えて（復刻）
中支ビルマ戦線従軍の記

二〇〇一年一月吉日

著者　小松正雄
699-0101 島根県八束郡東出雲町
大字揖屋町八四九
電話　〇八五二―五二―二三一九
FAX
印刷所　有限会社　松本印刷
八束郡八雲村日吉二五八―一